

論文の内容の要旨

論文題目

The Development from Case-Forms to Prepositional Constructions in Old English Prose

(古英語散文における格形から前置詞構文への発達)

氏名 佐藤 桐子

英語は、歴史的に見ると、総合的言語から分析的言語へと変化した言語である。この変化を示す重要な例として、屈折語尾の衰退とともに、格形が前置詞構文に取って代わられたことが挙げられる。古英語では、格形と前置詞構文が共存しており、同じ機能を果たすことがあったことは良く知られている。そこで、古英語の時代に、格形と前置詞構文の占める割合に変化があったかどうかについてであるが、先行研究は、「古英語期には大きな変化はなかった」という結論で一致している。しかし、極めて短い抜粋を調査していることや、異なる格や機能を区別せずに数えているなど、研究方法に従い難い点があり、この結論にはなお疑問の余地がある。

本研究の目的は、古英語における格形から前置詞構文への歴史的発達を明らかにすることである。そして、歴史を辿ると同時に、テキストの文体に着目し、作品固有の文体的特徴と統語上の問題との関係について考察しながら論を進める。調査するテキストは、初期古英語として、*The Parker Chronicle* (*ChronA*)、*Boethius' Consolation of Philosophy* (*Bo*)、*Bede's Ecclesiastical History of the English People* (*Bede*)、後期古英語として、Ælfric による *Catholic Homilies* の第一集 (*ÆCHom*) と *Lives of Saints* (*ÆLS*)、Wulfstan の説教集 (*WHom*) の合わせて 6 作品である。文体的な観点から言えば、初期古英語テキストのうち、*ChronA* はオリジナル散文、*Bo* はラテン語原典の自由訳、*Bede* はラテン語原典に忠実な訳であり、後期古英語テキストでは、Ælfric による 2 作品のうち、*ÆCHom* の大部分は普通の散文体、*ÆLS* は、殆どがリズムカルな散文、*WHom* は Wulfstan によ

るリズムカルな散文である。また、調査は、格形と前置詞構文が共存していた機能（または構文）に限定して行う。即ち、（１）手段・様態、（２）付随、（３）時点、（４）期間、（５）起源、（６）場所の特定、（７）独立与格である。

論文の第１章から６章で、上で挙げた６テキストの調査を行った結果、格形・前置詞構文が合計で 1937 例あり、その分布は表 1 のようにまとめられる。

表 1 格形と前置詞構文の頻度

	格形		前置詞構文	
	用例数	率	用例数	率
<i>ChronA</i>	125	83.9%	24	16.1%
<i>Bo</i>	37	36.6%	64	63.4%
<i>Bede</i>	267	52.8%	239	47.2%
合計	431	56.9%	327	43.1%
<i>AECHom</i>	71	13.3%	463	86.7%
<i>AEIS</i>	138	26.3%	386	73.7%
<i>WHom</i>	45	37.2%	76	62.8%
合計	254	21.5%	925	78.5%

この結果から、歴史的変化・文体的特徴について、以下のように結論付けられる。

歴史的変化

前置詞構文の比率で見ると、初期古英語では平均して 43.1%であるが、後期古英語では、78.5%であり、前置詞構文が増加し、逆に格形は減少している（表 1 参照）。この結果は、「大きな変化はなかった」という先行研究の結論とは違い、古英語期に重要な変化があった、ということを示している。

機能別に見ると、（１）手段・様態、（２）付随、（３）時点、（４）期間、（５）起源では、程度の差はあるものの、いずれも後期古英語では、前置詞構文への傾斜を強めている。一方、（６）場所の特定では、前置詞構文が大幅に減少し、格形が増加し、また、（７）独立与格では、初期古英語では格形の例が 1 例あるのみで前置詞構文は皆無だが、後期古英語では、格形が 37 例、前置詞構文が 16 例と、格形・前置詞構文の両者に増加傾向が見られた。この点については、次の「文体的特徴」で詳述する。

また、本研究では格形と前置詞構文の選択に意味が関与することを明らかにした。例えば、「手段・様態」では、「様態」には格形が使われる傾向があるが、「手段」の意味では前置詞が好まれる。また「期間」では、長い期間であることを強調する場合に特に前置詞を使う、と言える。

文体的特徴

表1から分かるように、同時代のテキスト間でも、格形・前置詞構文の比率に大きな相違があるが、これは個々の文体的特徴によるところが大きい。古英語テキストはそれぞれ固有の文体的特徴があり、テキスト間での統計上の違いは、この点との関連で吟味しなくてはならない。

まず、テキスト毎の重要な特徴を挙げる。初期古英語の場合、*Bede* では *Bo* より格形の比率が高く、*Bede* におけるラテン語原典の強い影響を反映している。しかし一方で、*Bo* でも *Bede* でも、格形・前置詞句の選択に意味が関与することもあり、「*Bede* は常に“over-literal”というわけではない」と主張した Whitelock の説を裏付けることが出来る。また、*ChronA* に含まれる *Cynewulf* と *Cyneheard* の記述など、一般に特異な文体であると認められている箇所について、格形・前置詞句の用法に関しても他とは違う特徴があることを明らかにした。後期古英語では、格形は、*ÆCHom*、*ÆLS*、*WHom* の順で高くなるが、このことは、リズムカルであるかどうかということとある程度関係があると思われる。

次に、より巨視的な視点から、古英語散文の文体的発達について考えたい。Bruce Mitchell は、*Old English Syntax* (1985, §3948) において、初期古英語散文の文体を“sometimes stiff and unwieldy”と評し、一方で *Ælfric* や *Wulfstan* などの後期古英語散文を“more flexible, more controlled, more varied”と評している。また、Fernand Mossé も、*Esquisse d'une histoire de la langue anglaise* (1958, p. 39) で、*Alfred* や彼と同時代の作家の文体は *Ælfric* の“mature”な散文には到底及ばない、と述べている。本研究で行った文体の考察は、ラテン語原典の古英語テキストへの影響の仕方が、Mitchell や Mossé の主張する散文文体の発達と無関係ではないことを示した。*Bede* では、「手段」・「時点」を表す格形や「期間」を表す *purh* が、ラテン語の逐語訳として使われ、これらは他のテキストでは、極めて稀、又は皆無である。一方、*Ælfric* の散文では、逐語訳とは異なった形でラテン語が重要な役割を担っている。即ち、*Ælfric* は、ラテン語の統語法を模範とし、それを英語に応用しているのである。これは、「場所の特定」と「独立与格」の用法に見られ、特に、独立与格は、従来ラテン語の逐語訳とされてきたが、*Ælfric* では約半数が原典に対応がなく、*Ælfric* 自身の文体と考えられる。実際、原典の文を短くする、文と文の従属関係を明確にする、など独立与格の持つ効果が *Ælfric* の文に認められることは、これが彼自身の文体であることを強く裏付ける。さらに、*Ælfric* は独立与格の用法を拡大し、分詞の代わりに形容詞を用いた例や前置詞を付けた例が、特に彼の後期の作品に現れた。このような独自の変化も独立与格が単なる逐語訳ではないことを示す根拠である。従って、*Ælfric* の散文のシンタックスを考える際、彼がラテン語に精通していたという事実は看過できない。また、*Ælfric* の散文の優れた点は、リズムカルな文体の発達にも認められる。*ÆCHom* と *ÆLS* では、後者のほうが格形を好むが（表1参照）、より短く簡潔な格形が、リズムカルな文体に合っていたことが理由の一つだと考えられる。また、*ÆLS* では稀に前置詞が頭韻を踏むこともあり、構文の選択と文体に関連があることを示している。

最後に、*WHom* では *Ælfric* よりも格形が好まれ、全体の約3分の1を占めており初期古英語に近い。このことは、一般的に古英詩において格形が好まれたように *Wulfstan* のリズムカルな

文体でも格形が好まれた、と考える良いかもしれない。しかし、先行研究の多くは *Wulfstan* の言語は現代的であるとの見方で一致しており、本研究の結果はこれとは全く逆であるが、この問題については今後の課題としたい。

残された問題

今後に残された問題について特に重要なものを三点挙げたい。一つ目は、本研究が明らかにしたように、機能によって前置詞の発達の早さに違いがあるが、この違いを言語学的な立場から説明しようとする試みはされておらず、考える価値があるかもしれない。二つ目に、中英語でも、ある特定の文脈では *his own hand(s)* などの格形が残っており、本研究の調査を中英語の時代へ広げることが可能であると思われる。三つ目に、統語と文体の問題、中でも *Ælfric* の散文の文体についてさらに研究の余地があると思われる。本論で扱った格形・前置詞構文以外にも、*beon/wesan gebuht* や原因を表す接続詞の *swelce* などラテン語を模範としたであろう構文が *Ælfric* にあり、それらはラテン語原典に対応がない場合もある上に、文体的な効果も認められる。このような表現について、本研究で行ったようにテキスト固有の文体的特徴を考慮に入れ、英語の歴史的变化という大きなコンテキストの中で考えることで、古英語の統語と文体についてさらに理解を深めることが可能であると思われる。